

# 真夏の夢の 映画共和国



## YUBARI INTERNATIONAL ADVENTURE FILM FESTIVAL

開会式 幼稚園児からゲストのみなさんへの花束贈呈

### 炭鉱から観光へ

夕張市は谷あいの街である。その谷底からさらに地底に向かって石炭を掘りつづけ、明治・大正・昭和と長い発展の道のりを歩んできた。それは日本国家の近代化の歩みとみこととに一致している。しかし街を訪れる人々が、夕張の活況を知るために、地下にもぐる必要はなかった。谷の両側にそびえる急斜面には、満天の星の如く炭住（炭鉱住宅）の夕餉の灯が瞬いていたからである。そこには最盛期（昭和三十五年）で、十一万七千人のほのぼのとした暮らしがあつた。

ここでは街の盛衰を左右してきた石炭の歴史を改めて語ることはしない。またかつての景況を懐かしむ感傷も振り捨てよう。資源採掘に頼る鉱業は、いずれは枯渇という宿命を負っているものだし、エネルギー構造の改革がなくても、その日が早くきたと受け止めるほうが前向きな姿勢と言えるだろう。しかもその嵐は、ひとり夕張だけではなく日本全国を等しく襲ったのだから、ひがみやわがままが許される訳もなかった。

### 映画祭への道

街を再生させ、人々の暮らしを守り、行政の最小単位としての努めを果たすことは、場当たり的な発想ではなし得ない。消えかけた石炭の炎にいくら手をかざしても、ぬくもりは伝わってこないのであつた。そこで夕張市は、街の栄光を支えてきた石炭に決別を告げ、産業構造の100%転換を試みたのである。「炭鉱から観光へ」を合言葉に新しい街づくりに取り組みをはじめたのは、昭和五十四年のことであつた。産炭都市が持つ暗いイメージの払拭

が目的であつたが、改めて地上の世界に目を向けた時、そこにはあまりにも広大な自然が手付かずのまま残されていたからである。

炭鉱はなくなってもその歴史は残さなければならぬ。市は、テーマパーク「石炭の歴史村」の建設に着手。ここに観光の町・夕張の第一歩が印された。昭和六十三年三月、夕張の観光開発は大きな転換期を迎える。「ソフト事業をおこす。そして集客を図る」市の新たな挑戦が始まった。「夕張から世界に向けて情報を発信する」ことができないものだろうか。「時代の潮流」という羅針盤をにらみながら調査を開始。針路は映像文化、マルチメディア、そして最大のエンターテインメントである映画の世界へと絞られた。

### ファンタスティック映画祭

一九七〇年、フランスはアルプスのモリジュー村でアヴォリアッツ・リゾートの開発が始まった。近隣には、サンモリッツやシャモニーそしてツェルマットなど名だたるリゾート地が集積している。その中でパブリシティを担当したのがリオネル・シュシャン（現ゆうばり映画祭顧問）だつた。

シュシャンは、建設が進むアヴォリアッツリゾートを目にした瞬間、ファンタスティック映画祭の開催を直感したと言つた。カンヌともベネチアとも違う、理屈抜きに楽しくおもしろい映画祭である。ホテルが二棟、コンビニが一軒、映画館が一館そろつた一九七三年、審査委員長にルネ・クレマン監督を招聘し、世界最初のファンタスティック映画祭が開催され、スティーブン・スピルバーグ監督の「激突」がグランプリに輝いた。



ストープパーティ  
マイナス20度の世界での熱い交流



雪の中の映画祭  
絵看板が来場者を迎えます



映画ツアー列車(千歳空港から夕張へ)  
市民の歓迎パフォーマンス(花笠音頭)

この映画祭をそのままトレースできないか、東京国際映画祭の石田達郎ゼネラルプロデューサーの全面支援を受け、平成元年一月、中田市長は十一人の刺客ならぬ十一人の使節団をアヴォリアッツに送りこんだ。花の都パリに行ける、アルプスのリゾートでスキーが出来る、使節団はルンロンであった。しかし、フランスが誇るTGV(新幹線)に乗り、すでに二万人が宿泊できる大リゾートに成長していたアヴォリアッツを目にした時、一行は戦慄した。すでに矢は放たれ、戻ることは許されなかったからである。

### 映画の灯を消してしまえるか

夕張での国際映画祭の開催を控えた、平成元年十月六日、東京国際ファンタスティック映画祭の閉会式にのぞんだ中田鉄治市長は満員の観客に熱意を込めて宣言した。「炭鉱の最盛期、夕張には十六館もの映画館がありました。炭鉱城下町にとって、映画は最高の娯楽であり、情報文化そのものでもあったのです。閉山による人口の流出は、すべての映画館の灯りをも消してしまいました。夕張市は常設の映画館を直営で経営しています。赤字もヘツクレもない。市民に映画を観てもらいたい、ただそれだけです。大型スクリーンこそ豊かな感性を育み、知恵と勇氣、そしてやさしさを与えてくれるのです。この町で来年の二月、国際映画祭を開催します。どうぞ皆さん、夕張に来て下さい」

### 市民が支える国際イベント

あれから十三年、想い出や実績を紙面上で語り尽くすことはできない。五回目の映画祭

を終えた頃から「冬のゆづばり映画祭は夢と心のときめきを与え、北海道を世界に売り込む数少ないイベントにまで成長した。そしてその成功の陰に市民ボランティアあり」とさやかれるようになった。

「国際映画祭って何だ、当初夕張の市民たちは大いに戸惑った。市民どころか、スタッフも実はよくわからなかった。市民が自らの発想と力で何ができるのか、三年が経ち、五年が過ぎる。継続は力である。市民のパワーが徐々に炸裂していった。ツアー列車に並走する青年団の歓迎トラック横断幕、消防団員の吹奏楽、夜な夜な繰り広げられるストープパーティ、何でもありき・二十四時間営業のみんなの家、地元スキーチームによる松明滑走、婦人団体の手作り料理、映画祭は千人に及ぶボランティアで支えられている。

### 真冬の夢の映画共和国

サウンド・オブ・ミュージックの巨匠ロバートワイズ監督に「おじいちゃん、ウロウロしているとあぶないよ」と声をかけ、「フランク・シナトラなら知ってるけど、シャルル・アズナブルって歌手は知らないなあ」と心える市民、そんな町の人々にワイズ監督もアズナブルさんも市民のホスピタリティが最高だったとエールを送ってくれた。

白銀の世界を背景に、映画人と観客、そして市民との間に垣根のない映画共和国、それがゆづばり国際ファンタスティック映画祭の全貌でありコンセプトである。

### ゆづばり国際ファンタスティック映画祭実行委員会

札幌事務局長 津島 慧



さよならピュッフェ  
藤村志保さんとボランティアの婦人達



みんなの家  
山田洋次監督を囲む会

ウエルカムパーティ  
スターの餅つき大会